

平成25年度 学校自己評価表(中間評価)

鳥取県立倉吉東高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。	今年度の 重点目標	1 主体的学習者の育成 2 キャリア教育の充実 3 積極的な活動の創成 4 広報連携力の強化 5 定時制教育の充実
-------------------	---	--------------	---

年度当初					評価結果(中間評価)		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1. 主体的 学習者の育 成	文武両道 と規律ある生活による自立の促進	・生徒自身の学びが内発的なものとなり、日々の学習が緊張感と着きの中ですすめられている。 ・学校生活が品位ある言動に満ち、生徒は環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。 ・生徒全員が部活動に加入し、学習との両立のなかで、部活動が主体的、積極的な活動となっている。 ・教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性のある指導ができる。	・自ら計画的に進んで学びを深化発展させている生徒もいるが、多くは与えられる学習にとどまっている。 ・気持ちのよい挨拶ができるようになったが、一部の生徒に思慮のない言動や服装違反が見られる。	・生徒が身につけるべき学力の到達目標を学年ごとに明確にし、学年集会など折に触れて徹底する。 ・生徒の学びが深化発展するよう、学校行事(講演会)等を戦略的に計画実施する。 ・思慮のない、利己的な言動に対しては、毅然とした指導を行い、生徒自らの行動が他に与える影響について深く考えさせる。 ・生徒会執行部や生活環境委員等を推進役とし、生徒の主体的な活動を育成し、環境整備、規律徹底を推進する。	・課題の提出状況は概ね良好だが、取り組み姿勢が消極的で、やらされる課題に終始している生徒が多い。 ・学年ごとに進路講演会等を開き、学びへのモチベーションを高める工夫がなされている。 ・学校生活における基本的な生活習慣(挨拶、服装、時間を守るなど)は、上級生のリードのもと全生徒に浸透している。 ・携帯電話(SNS)の使い方、マナー等において問題のある生徒がいる。 ・育友会のホームページ委員会と連携して、親子を交えたスマートフォンの使い方研修会を開催した。(～保護者と生徒のための「IT研修会」～) ・部室の鍵管理方法を変え、生徒の部室管理の意識も高まりつつある。 ・学年会、分掌部会、教科学年主任会等が定期的(毎週)に開かれ、分掌、学年のホットな課題をとりあげ、職員間の連携を図っている。	C	・生徒の週末課題等の質を高め、学びが内発的なものとなるよう職員は授業に全力を注ぐ。また、提出課題の点検を通して、問題のある生徒に対して改善を求める粘り強い指導を行う。 ・携帯電話の使い方については、家庭でしっかり教育していただけるよう、保護者啓発に努めると同時に、LHR等を使って匿名性の中での行為について、プライバシー保護、人権侵害等の観点から考えさせる。 ・新しい鍵の管理方法の定着を図り、さらに生徒の意識を高める。 ・引き続き会議を定例的に持ち、課題の早期発見に努めるとともに、各課題解決にむけて、職員自らが率先してできることを具体的に示し、実行する。(生徒の課題は職員の姿勢に問題があることを明確にしていく。)
	「アクティブラーニング(能動的学習)」の研究推進	・生徒の学びがテストや大学受験といった実利的目的を越え真理探究といった高次なものとなっている。さらに、生涯にわたる学びの意義や教科の魅力を理解し、学習が内発的・主体的なものとなっている。 ・昨年度研究推進してきた「協同的な学び」の理論を発展させ、「アクティブラーニング」の考えを取り入れ、指導力を高めるための教員研修に積極的に参加し、その成果が日々の学習指導に還元されている。	・生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてあり、内発的・主体的な学習になっているとは言えない部分がある。 ・研究授業への参加が十分とは言えない。また、教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。	・職員研修等を通して、生徒の学びが内発的・主体的なものとなるようにする。 *年度の初めに「アクティブラーニング」に関する理論と概要について教員研修の場を設け、理解と意識の向上を図る。 *推進教科を設け、先進校教員との示範授業・研究授業・授業研究会を通して指導力の向上を図る。(地歴・数学・理科・芸術) *県が主催する研修にも積極的に参加し、その内容を教科内あるいは全職員で共有し日常の授業で活かす。 ・校内研究授業を活性化するなど、校内の教育資源を最大限活かす努力をする。 ・「アクティブラーニング推進チーム」のミーティングを適宜行い、計画の進捗状況を確認するとともに、分析と評価を行い、課題の解決を図る。 ・アドバイザーを委嘱し、中間評価・最終評価をはじめ年間を通して本校の取り組み全般の改良改善を図る。	・5月と9月に外部講師による理論研修を実施した。多くの教職員が参加し、内発的・主体的な学びの重要性を理解し、普段の授業に活かそうとしている。 ・今年度推進教科である理科(5月)と数学(9月)、地歴(10月)において研究授業と示範授業を実施した。教科を超えた参観者があり、アクティブラーニング型授業のヒントを得ようという意識がみられた。 ・校外研修に5つの教科の代表者が参加している。校内職員研修で内容を報告し全職員で共有している。 ・校内研究授業を実施したのは3教科で、計画通りに実施されていない。また、教科横断的に授業相互参観が行われ、本校教員が持つ教科指導力から十分に学んでいるとは言いがたい。 ・「アクティブラーニング推進チーム」のミーティングを年度の初めに開き、年間計画と各教科で推進することを確認した。前期授業評価アンケートによると、92%の生徒が「授業中に教え合いや意見交換による課題解決の場面がある」としている。これは、昨年同時期より8%増えている。 ・アドバイザーには、昨年に引き続き、取り組みに対する評価やアドバイスをいただく予定である。	B	・残りの推進教科(芸術)において、研究授業と外部講師による示範授業を実施し、授業改善の意識を高める。 (「美術」1月実施予定) ・他教科の授業研究では、教員視点ではなく生徒の学び、思考や活動に目を向けやすいので、生徒視点(教え方より学び方)で授業研究ができるようはたらきかける。 ・校外研修の内容を日常の授業で意識して実践できるよう、教科内や全体で共有する。また、校外自主研修希望を企画推進部から全体に募り、計画を具体化し、意欲が形となるよう努める。 ・企画推進部は、校内研究授業実施計画を掲示・周知し、計画通り実施する。授業相互参観を通して、本校教員が持つ教科指導力を自身の授業改善につなげる機会を提供する。 ・アドバイザーに後期に行われる研究授業の案内をしている。授業後に行われる研究会に参加していただき、授業改善への助言を仰ぐ。
2. キャリア 教育の充実	進路指導力の向上	・全職員が「倉吉東高校のかたち」に基づいて、学校生活のあらゆる場面を通して、生徒の意識が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと向けられるような生き方指導を行っている。 ・全職員が進路指導に関する適切な知識や技能を習得し、3年間のどの段階においても、適切な指導を行っている。	・多くの生徒が視野を広げ、適切な進路目標を立てているが、一部には依然として意識が社会や貢献に向けられない生徒も見られる。 ・各学年の進路検討会など職員研修への参加者は増えたが、発言する教員は限られており、個々の教員が持っている進路指導の知識や技能が十分に共有できているとは言えない。	・全職員が授業や進路指導だけでなく様々な場面を通して、本校の教育理念の生徒・保護者への浸透を心がけ、生徒が受験を通して自らを高め、社会にかかわろうとする意識が高まるよう取り組む。 ・職員研修での積極的な意見交換を促すほか、職員一人ひとりが日々の取り組みを通して進路指導に関する情報を受発信できるよう努力する。 ・本校教員が鴨水館生の進路指導を日常的に行うことによって進路指導力を高め、本校生指導に生かす。	・HPや刊行物、講演会などを通して、本校の教育理念の保護者、外部への浸透に努めた。また進路を考える中で、他者や社会に目を向けるようになり、自分の進路目標の実現を社会貢献につなげようよう考える3年生が増えてきた。 ・3専新旧担任会(4月)、3年進路検討会(6月)には平均35名の参加者があり、参加状況は良好である。	B	・今後もHPや講演会を通して校内外への啓発を行う。また学年進行とともに、学習の意義や進路目標に対する理解が深まるよう、低学年にも面談や学年集会など適切な指導を行う。 ・3年進路検討会(12・1月)、1・2年進路検討会(2月)では、活発な意見交換とスムーズな進行ができるよう会の進め方や雰囲気作りを工夫する。
	中堅・難関大学合格者数の発展	・中部地区を代表する進学校として、生徒・保護者・中学校などからの期待にふさわしい実績を維持し、さらなる向上が期待できる。 ・国公立大学現役合格者数125名以上。 ・中堅国公立大学以上現浪合格者数70名以上。 ・難関大学現浪合格者数20名以上。 ・東京大学現浪合格者数5名。	【国公立大学現役合格者数】 H22年度157名 H23年度145名 H24年度140名 【中堅国公立大学以上現浪合格者数】 H22年度67名 H23年度66名 H24年度52名 【難関大学現浪合格者数】 H22年度16名 H23年度21名 H24年度21名 【東京大学現浪合格者数】 H22年度6名 H23年度3名 H24年度2名	・1年次から志望校指導を行い、適切な進路目標を設定させる。 ・国数英の基礎力を定着させるための1年次における初期指導を充実させる。 ・各生徒の苦手科目の学習法を点検し、効果的な学習法を身につけさせることによって、3年次には全ての生徒にCTに対応できる学力を保障する。 ・鴨水館生のデータを活用し、本校生指導の精度を高める。 ・二次試験に必要な力をつけるために、補習授業や課外の内容を精選し、必要ならば習熟度別などの工夫をこらす。 ・卒業生に接したり、県内外での難関大合宿などに参加することで、目標達成の意欲を高め、具体的な方策が得られるよう指導する。 ・東大志望者のチーム力を高めるとともに、三校合同講座などを通して校外からも刺激を受けながら、模試や補習授業・課外などで具体的な指導を行う。	・1年次から志望校指導を行い、生徒の目標の適正化に努めている。 ・1年生に対して入学後のオリエンテーション合宿から丁寧な初期指導を行ってきた。 ・マーク模試の自己採点や進路検討会では鴨水館生との差を過年度と比較し、現役生の力の把握に活用している。 ・補習授業や放課後課外では、生徒の力に応じて、CTから難関大まで習熟度別指導を行っている。 ・大山合宿や島根大学生による母校訪問では卒業生が良い刺激を与えてくれた。また8月の2年難関大合宿(大山)には19人の生徒が参加した。 ・担任による指導と併せて、4校合同講座に14人が参加している。また補習授業や放課後課外でも東大対策講座を実施し、チームとしての集団力を強化している。	B	・今後も志望状況の把握に努め、学年内で情報交換をしながら指導を行う。 ・1年生の数学・英語については個別の指導も交えながら、下位層への指導を継続する。 ・放課後課外をより充実したものにするとともに、CT後の二次課外が効果的なものになるよう計画を策定する。 ・今後11月2年難関大合宿(岡山)、12月1年難関大合宿(大山)にも参加の予定である。 ・2年生韓国研修の機会を利用し、大学見学・模擬授業参加・OB講演・企業見学を行い、進路意識をさらに向上させる。 ・3年に対する指導を継続するとともに、1・2年に対しても学年段階に応じて東大を目指す意義を伝え、チームとしてのまとまりを強めていく。

年度当初					評価結果（中間評価）		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	改善方策
3. 積極的な活動の創成	活動創成と人間関係力・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	・全ての生徒が自らのリーダーシップを自覚し、常に創造的な態度で生活している。	・リーダーの資質を持っている生徒は少なくないが、日常的に発揮する場面が限られており、創造性を十分に発揮できていない面がある。	・生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事、日常的な委員会活動を通し、リーダーシップを発動できる場面を数多く設定する。また、それらの行事が例年通りで終わらないように、生徒の創造性を十分に発揮させる。	・学園祭や高校生フォーラムなどの行事を通し、生徒たちの人間的な成長がみられた。また、校舎改修やクラス減などの変化に対しては、生徒たちの創造性の発揮により対応することが出来た。日常的な委員会活動では、まだ活性化の余地がある。	B	・後期の新執行部がリーダーシップを発揮し、自ら問題を発見し、関係委員との連携に置いて問題解決に当たる。
		・生徒自身が社会に広く関心を持ち、社会的課題に対し当事者意識を持っている。	・社会的に逸脱した行動をとる場面はほとんど見られないが、よりよい社会にしていこうとする態度の育成が不十分である。	・学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、また日常生活においても、交通安全指導や服装指導を通し、自らと社会との密接な関わりを意識させる。	・読書小論文委員会との連携によって、プレゼンテーションコンテストや国際高校生フォーラムのテーマに対し、例年よりも全生徒が積極的に取り組むことができた。社会への関心も高まったが、自己の具体的な生活に結び付けて考えて行く姿勢の育成に工夫が必要である。		・来年度の国際高校生フォーラムのテーマもしっかりと吟味し、生徒たちが立ち向かう価値のあるものにする。引き続き読書小論文委員会との連携を大切にし、全校で社会のことを考える雰囲気作りを行う。また、学年や他部と連携し、生徒指導の充実を図る。
		・自分や社会の将来に希望を持ち、今現在という時に充実感を感じながら、真剣に日々の生活を送っている。	・自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多くいる中で、自らの持つ資質に自信が持てないまま、学校生活に消極的になっている生徒もいる。	・生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通し、人の役に立つことの喜びを味わわせ、自らの存在に肯定的な感情を育てる。また、教育相談を充実させ、生活に消極的になった生徒に対し、自分ができることを少しずつ達成させていくことによって、自分への自信を取り戻させる。	・学園祭やクラス役員としての活動、また部室棟の清掃活動を通じて、集団の一員としての役割を自発的に果たそうとする生徒が多く見られた。教育相談においては、学校生活に意欲や自信を失った生徒に対し、スクールカウンセラーと連携しながら、個別対応を適宜行った。		・教育相談については、今後もいっそう学年との連携を強めて、問題を抱えている生徒の早期発見、早期対応に努めていく。
4. 広報連携力の強化	積極的な広報活動による地域や中学校からの共感の促進 育友会・同窓会との連携促進	・地域の方や各中学校関係者に本校の教育方針・教育内容が十分理解され評価されている。	・本校の教育方針・教育内容について、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。	・本校のHPを充実させ、教育活動を適切に外部へ情報発信できるよう努める。 ・学校案内を刷新し、中学校への広報力を強化する。 ・中学生を対象とする高校説明会を充実させる。	・HPの更新は適切に行われており、4～8月の一日平均アクセス数は、昨年比20％増の1379件であった。 ・学校案内が刷新され、印象に残る構成となった。 ・高校説明会で中学生とチューターとの座談会を設けた。中学生にも好評であった(97％が「分かりやすかった」と回答) ・中学校主催の説明会には16名の職員を派遣した。 ・学校訪問などでの来校者に対する説明は、必要に応じて適任者で対応している。	A	・今回の学園祭や国際高校生フォーラムの反省をもとにし、本年度後期より綿密な計画を練り上げて行く。
		・全職員が本校の教育方針・教育内容について適切な説明をすることができる。	・管理職だけでなく、多くの教員が中学校訪問を行い、本校の教育について説明をしている。	・中学校主催の説明会や進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校への理解が深まるよう工夫する。 ・本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、キャリア形成部や企画推進部以外の教員も行い、発信能力の向上に努める。	・実施回数は昨年並みだが、アンケート結果を基に中学生の興味・関心に沿った教材を精選し、教育効果を上げる工夫を行った。		・さらに教材・教育方法の充実を図る。
		・本校が各中学校の実態を十分理解しており、生活指導・学習指導等について、中学・高校の連続性がある。	・倉吉東中学校と「スクラム教育推進事業」を行い、英語・数学における連携を深めているが、全教科・領域の連携に至っていない状況にある。	・倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」を充実させるとともに、公開授業等を積極的に利用して、中高連携の促進に努める。	・「英語ブラッシュアップ講座」の参加希望者は、87名である。(昨年度88名) ・ソフトボール部、バレーボール部、バスケットボール部、卓球部、剣道部、サッカー部などで、中学校との合同練習を行った。		・中学校訪問説明会の機会等を通じ、講座の意義を説明し、参加を募る。 ・中学校の先生方の参加(見学・共同授業等)も募る。 ・部活動顧問に対し、今後も積極的に中学校部活動との連携を呼び掛けていく。 ・小学校への出前授業を予定している。(10/11/2月)
5. 定時制教育の充実	積極的な生徒指導 進路保障と学力の向上	・自己の進路目標を決め、その実現に向けて主体的に学習や行事等に取り組んでいる。	・3年次生11名のうち、現在、進学希望3名、就職希望4名、未定者4名だが、進学・就職希望者にしてもまだ流動的で、具体的な将来像を描いたり、進路を決めかねている生徒が多い。	・ハローワークやキャリアアドバイザーとの連携を密にし、正規採用に向けて職場訪問や書類作成・面接指導等を計画的に行う。 ・卒業生等との座談会や進路講演会に加え、社会人としてのマナー講習会等を効果的に取り入れ、進路意識の向上を図る。	・9月時点の就職試験応募者は2名で、進路担当者やキャリアアドバイザーとも連携を密にして指導を行い、他の就職希望者の指導も継続している。	B	・就職希望者の面接等の個別指導を職員間で連携して継続する。また、若者サポートステーション等との連携も深め、就職に向けた取組を行う。
		・課題に真面目に取り組み、提出物の期限が守られている。	・中学校で不登校経験を持つ生徒や、進路変更で転編入した生徒が多く、まず登校させレポートを提出させることの指導が必要な生徒が多い。	・レポート作成のための時間や場所を設定したり、個別指導を行う。 ・定期的に情報交換会を持ち、生徒個々の状況を職員間で共有して連携した指導を行う。	・昨年度に継続して夏季休業中の登校日を実施し、卒業生との座談会を開催した。座席を工夫したり、卒業生からの質問も取り入れることで、より卒業生との交流が増し、進路を考える上で有意義であった。また、今年新たに取り入れた、マナー講習会も進路意識を高める良い機会になった。 ・1年次生徒を中心に、レポート作成のための時間を設定して指導したり、国数英のテキストを準備して授業以外でも基礎力の定着に向けた取組を始めたが、まだ機会が少ない。		・特別支援の必要な生徒の面接指導や進路に対応した個別指導を継続する。
		・わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。	・基礎的な学力・能力が不足しているので、理解するのに時間がかかる。	・授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。 ・1年次から基礎学力定着の学習を取り入れるとともに、課外を計画的に実施し、進学・就職それぞれの生徒に対応した指導を行う。	・授業公開が実質7月からになってしまい、参観者が増えなかった。各自の視点に加えて共通テーマとして「基礎的内容の定着」を設定して参観を行い記録を職員間で回覧することで、参考になる部分の共通理解を深めた。 ・夏季休業中に計画的に国数英の課外を実施した。欠席も少なく進学に向けて意欲的な生徒が増えている。		・先進校視察を実施し「学習指導」や「生徒との関わり方」等を職員間で共有して指導に生かす。
		・生徒が心身ともに健康で、主体的に学校生活に取り組み、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。	・生活環境面などで問題を抱え、主体的に学校生活や学習に取り組めない生徒が少なくない。	・積極的に面接や家庭訪問・職場訪問を実施して生徒一人ひとりのおかれている生活状況等を把握し、保護者と連携して進路実現に向けたきめ細かい指導を行う。 ・今年度新たに2年次生の進路意識と勤労観を涵養するため、県外へ研修旅行を実施する。	・職員間で情報交換を密にし、保護者と連携して欠席の多い生徒を粘り強く指導したが、長期欠席者が増えている。スクールカウンセラーによる1年生との全員面接や、心のケア支援をはかるために臨床心理士との個別面談を継続している。 ・2年次生徒の首都圏研修を12月に企画し、進路を考えた見学先等について検討を始めた。 ・囲碁・陸上で全国入賞し、卓球、バドミントンでも全国大会に出場して貴重な体験を積んだ。		・授業公開期間を早めに設定して参加者を増やし、指導方法の工夫に生かす。 ・2年次生研修旅行について事前に十分に計画を立て、進路意識等を高める。 ・外部指導者の支援も活用して、消費者教育や携帯・インターネット教育について啓発する。

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80％以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60％～80％の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値目標を掲げた項目では、40％～60％の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40％未満である。